

# キーワードで読み解く 大学改革の針路

第3回

## ルーブリック



金沢大学  
大学教育開発・支援センター  
准教授  
杉森公一

筑波大学大学院教育研究科修士、修士（教育学）。金沢大学大学院自然科学研究科修士、博士（理学）。金城大学医療健康学部助手、助教を経て2013年4月から現職。専門は計算量子化学、理科教育および大学教育開発。リメディアル教育の実践を通じた教材開発や出席カード、クリッカーを活用した授業改善に取り組む。

### 学生との共同による アウトカムの評価

ルーブリック (rubric) は、ラテン語の「rubrica=朱書き」の意で、重要箇所や規則を強調する宗教用語が語源である。ルーブリックは、履修前に学生に提示するシラバスと対をなし、単位の実質化や学修時間の確保を促す方法の一つとして位置付けられてきた。

知識がどれだけ定着したのかという量的評価を超えて、どのような能力をどの段階まで求めるのかという学修成果 (ラーニング・アウトカムズ) を指標として学生に示す。そして、学生と教員が相互に学修の質的な成果を確認し合うことによって、成績評価を形づくることを重視して作成・活用される。

ルーブリックは、課題、観点 (学修規準)、評価の区分、評価基準からなる (図表1)。設定された課題の内容に応じていくつかの観点が示され、3～5段階に分割された表に、各レベルに該当する具体的な成果が例文で記述される。

【図表1】ルーブリックの構成要素

・課題 めざすべきパフォーマンス
・観点 (学修規準) 課題に必要なスキル
・評価の区分 評価のレベル (3～5分法)
・評価基準 観点と評価の区分により規定される内容

ルーブリックを作成するには、過去に提出されたレポート等のパフォーマンス課題とその評価を振り返ることから始めるとよい。学生に何を期待し、なぜその課題を与え、そのとき何が起こっていたかを明らかにするのだ。「優れている」と評価された成果物の共通項から、その時点での評価者の主観が明らかとなるだろう。評価者が複数いる場合には、評価の共通点と相違点が見いだされるだろう。

その科目の担当教員だけでなく、同僚やTA、または学生と一緒に作り、課題を与える前に学生と共有することが必要である。明示された基準に基づく公正な評価こそが、教員と学生、双方の納得につながる。複数の教員が担当する科目では、教員間の評価基準の共有も可能となる。

教員間、科目間、さらには大学間で、同じ課題を実践し、ルーブリックと学生の成果物を持ち寄って調整する「モデレーション」が、観点の不備や評価基準の飛躍を補正する有効な方法の一つである。

共同開発された汎用ルーブリックによって、個々の大学、学部、学科、科目のルーブリックの作成を支援する試みもある。全米カレッジ・大学協会 (AAC&U) のVALUEルーブリックは、教養教育によって形成すべき能力として抽出した15領域について、学士課程4年間にわたる長期的なルーブリックとして作成されている。これを参考に、それぞれの大学、学部、学

科、科目の文脈に合わせてローカライズして活用することができる\*。

### リアルな状況下での 能力の活用を問う

学修成果の観点は、ブルームが分類した「認知領域 (知識・理解、思考・判断)」、「情意領域 (関心・意欲、態度)」、「精神運動領域 (技能・表現)」の3領域を、それぞれアタマ・ココロ・カラダと置き換えるとイメージしやすい。ルーブリックで示す評価基準は、能力・スキルの質を問う形成的な「パフォーマンス課題」の評価に対応している。複雑でリアルな状況の下で能力が活用された状態を問うこと、つまり、座学での知識伝達 (記憶・理解) にとどまらない知識活用と問題探究 (応用・創出) の力を求め、学校知が真正性 (authenticity) を帯びるかどうか注目に意味で、「真正の評価」の方法とも呼ばれる。

観点別目標と絶対評価が用いられる初等・中等教育ではルーブリックの活用が先行している。知識基盤社会の到来を背景に、社会人基礎力、キー・コンピテンシー、学士力といった新しい学力観が要求される時代にあって、主体的学びの評価が求められている。

### 同僚、学生を含む 評価者の共通理解の深化

全学的な教学マネジメントに向けて

\*松下佳代「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析をもとにして」京都大学高等教育研究 18号 75-114頁 (2012)

近年、学修成果の評価においては、知識の量を測るだけではなく、どのような能力をどの段階まで高めたかという到達度を重視するパフォーマンス課題の評価が求められている。そのためのツールとして、「ルーブリック」が注目を集めている。

3つのポリシーの策定やカリキュラムマップの整備が進められている。次のステップとして、学生と教員による学修成果、到達地点の共有、学士課程における中長期のルーブリックの開発が必要である。学びの振り返りによって質保証のPDCAサイクルを完結させれば、生涯にわたる自立的・自律的な学

びに接続できる。

国内の大学教育ではルーブリックは導入され始めたばかりで、評価モデルの確立にまでは至っていない。魔法の杖のような万能なルーブリックは存在しない。他大学で成功したものをそのまま使用しても、うまくいく保証はないのだ。自学の実情と教育内容に合わせ

て、まずは実践してみることが必要である。

自らの教育・学修のあり方を見つめ直し、評価者 (同僚の教員、TAなどの教育補助者、学生も含む) 同士の共通理解を進めるといふ、ルーブリックを用いた評価そのものに光を与える可能性がある。

### 実践例

## 金沢大学 「アクティブラーニング入門」におけるルーブリックの活用

### 学生自身による省察の経験そのものが 主体的で能動的な学習を促す

大学教育開発・支援センターは2014年度、共通教育の総合科目として1、2年生を対象に、「アクティブラーニング入門」を開講した。LMS (学習管理システム) を通じた事前課題とショートビデオの提示、クリッカー (リモコン式意見集約装置) による事前課題の確認や双方向授業、協調学習やプロジェクト活動など、アクティブラーニングを取り入れた試行授業を行っている。

図表2は、第2、3週目の授業「ラーニングとティーチング」でのグループ活動およびレポート課題のルーブリックである。近年、高等教育においては学習者を主体 (中心) にした教育・学習方法への転換が促されていることを知識として伝え、以下3点についてグループワークと討論を行った。

- (1) 大学でどのようにして学ぶのか。
- (2) 自律的・能動的な学習を通して「問う力」「考える力」を得ることがで

きる機会と環境には、どのようなものがあるか。

- (3) 卒業後に社会参画する (実際の課題解決に応用する) ためには、どのような能力・コンピテンシーが重要か。

ルーブリックを用いて評価基準を示し、15週目の授業で形成的評価を行うこと、すなわち学生自身による省察を伴

う学習経験そのものが、主体的で能動的な学習を促すことになる。最終回には『学生フォーラム～学生の提案する理想の学び』と題して一般公開の成果発表・総合討論を実施した。

教員の期待をルーブリックの評価基準に示すことが、学生の学びの動機付けに影響し、教員と学生の目線を合わせる契機になる。「すばらしい」に示す内容は学修到達度の最高段階として制限するものではなく、できる限り高い期待を伝えることが成功の鍵となる。

【図表2】「能動的学び」レポートのルーブリック

評価基準	すばらしい	もう少し	もっと
【知識・理解】 大学でどのようにして学ぶか、自分の言葉で主張できる	大学での学びについて、講義の視点をふまえて自分の言葉で論じている	講義の要約はできているが、自分の主張が明確でない	講義内容をふまえておらず、主張がない
【表現・思考】 問う力、考える力を得る機会と環境を述べている	多面的な視点から、問う力と考える力を得る機会と環境について自分の考えを論じられた	機会と環境について、項目ごとに分けてまとめ、整理できている	項目が整理されていない
【理解・態度】 グループでの討論内容が反映されている	グループ活動を通じて他者の考えを受容し、取り入れることについての気づきに触れた	グループ活動の感想が述べられた	グループ活動の感想がなく、自分自身の変化の気づきについて触れていない